



自分のペースで食事の自力摂取を ～利用者の意欲向上に向けて～



森町愛光園 入居サービス課
天宮サテライト
渡辺未佳

【施設概要】

- 本体施設 80床 サテライト型施設 29床 の定員で、一体的に運営を行っている介護老人福祉施設



お一人お一人の思いに寄り添い、生活リズムを大切に
した最善の介護サービスの提供をめざしています



【はじめに】

- 食事の配膳・薬の内服介助・食事介助を1人の職員で行っている
 - ・他利用者様の対応で、食事介助が中断してしまう
 - ・食事介助が職員のペースになりがち
- A様は左手で食事を自力摂取する能力は十分にあるが依存が強く自力摂取ができない
 - ・なぜ、自力摂取ができないのか？



【目的】

自分のペースで食事を自力摂取する意欲を向上させる



【対象者】

- A様 H26・10入居 女性
- 年齢 90歳代前半
- 介護度 4
- 脳梗塞により右片麻痺(H26.3)
- 脳血管性認知症(Ⅲb)
- 左手は可動域の制限はなし
- 言語障害があり、言葉が少々不明瞭だが聞き取ることは出来る
- 食事形態 主食:粥 副食:キザミ 水分:トロミ エプロン 自助具のスプーン使用



〈生活歴〉デイサービスに通っていたが、行きたがらず、自分で電話して休んでしまう。動くことが嫌いで、食事、トイレ以外はほぼ寝て過ごされていた



【倫理的配慮】



対象利用者・ご家族・職員に対して、研究の趣旨、個人が特定されないように個人情報保護する事、協力の辞退によって不利益は被らない事、以上について説明し、同意書にて同意を得る



【方法】



ケア記録の内容を4期に分けて、A様の食事の様子や反応、職員のとった行動を整理し考察する。

- 1期 実施期間 5/14～6/3
 - ・お茶のコップを口の広いコップに変更 ・声かけ
- 2期 実施期間 6/4～6/30
 - ・お茶・汁をゲルに変更 ・声かけ
- 3期 実施期間 7/1～7/29
 - ・粥・副食一品の食器の変更 ・声かけ
- 4期 実施期間 7/30～8/29
 - ・使う食器の増量(使い方、盛り付け方は統一せず)
 - ・声かけ(どんな料理なのか、想像してもらえるように細かく説明)



【結果】 1期 実施期間 5/14~6/3



- ① お茶→口の広い浅めのコップへ変更
⇒以前より飲みやすくなったが、自力でスプーンを使い飲むときは、口に運ぶまでにこぼれてしまい意欲の低下がみられた
- ② 声かけ→「これは〇〇ですよ」「美味しいですよ。食べてみましょう」
⇒「手が動かない」
口を開けて食べさせてほしい等のアピールがあり依存が強く自力摂取できなかった



【結果】 2期 実施期間 6/4~6/30



- ① お茶・汁をゲルに変更
1:一口サイズ
2:さいの目状
3:ジュレ状
} **ジュレ状にすることで自力でよく口に運ぶ事ができた**
- ⇒見た目が変わり興味をひく事ができ、「これ何？」と聞かれたり、自らスプーンを持ち自力摂取しようとする意欲の向上がみられた。
2~3日するとその状態に慣れてしまい、意欲が低下し元の状態に戻ってしまった
- ② 声かけ
⇒1期と同様の結果



【結果】 3期 実施期間 7/1~7/29




- ① お茶・汁のゲルは継続
- ② 食器の変更⇒介助皿大→粥 介助皿小→副食一品
⇒見た目が変わり、興味をひく事ができ自らスプーンを持ち自力摂取しようとする意欲の向上がみられた。
職員全員が同じ入れ方をしていた為、2~3日したら慣れてしまい、意欲が低下し元の状態に戻ってしまった。
- ③ 声かけ
⇒1期と同様の結果



【結果】 4期 実施期間7/30~8/29



- ① お茶・汁のゲルは継続
- ② 使う食器の増量
 介助皿 大 介助皿 小 浅い角皿 コップ 厨房より届く食器
使い方は統一しない。その時の職員に任せ、毎食見た目を交える(食器をどのように使ったか、A様の反応を記録に残す)
- ③ 声かけ→料理を細かく、分かりやすく説明しどんな料理なのか想像してもらう
⇒1時間程かけてゆっくりと自分のペースで自力摂取ができるようになった
1週間程でスプーンを使うのがじれったくなったのか？手掴みで食べるようになってしまった
- 8/31 脳梗塞の為入院 9/18 看取りで退院され食事が摂れなくなった為、終了する



【考察①】



毎食、食事の見た目を変え、視覚を刺激し、食事に興味を持ってもらい、食事の意欲を高める

食欲のメカニズム

視覚・嗅覚などの五感が感じ取り、食欲が喚起される

毎食、色々な食器を使い、いろいろな盛り付け方をしたことにより、視覚を刺激できた



【考察②】



料理を細かく、分かりやすく説明し、五感の過去の記憶を思い出し、摂食の行為につながる

食欲は脳の視床下部でコントロールされている

匂いや食感などの五感の過去の記録が記憶される部分で、脳に伝えられた情報から過去の記憶を思い出し、摂食の行為につながる

A様の食事形態:粥・キザミ食→毎食、色が違うだけで見た目は変わらない

食事の内容に興味を示すような行動変容がみられた



【結論】



自分のペースで食事を自力摂取する意欲を向上させるにはどんな介助が有用か？

- ① 毎食見た目を変え、視覚を刺激し、食事に興味を持ってもらい、食事の意欲を高める
- ② 料理を細かく、分かりやすく説明し、五感の過去の記憶を思い出してもらい、摂食の行為につなげる



【まとめ】 研究の限界と課題



単一事例研究の為、脳血管性認知症の方すべてに、この関わり方・介助方法が有用とはいえない



手掴みで食べてしまうという課題は残ってしまったが、自分のペースで食事を自力摂取する意欲を向上させるにはどんな介助が有用だったかを考察できた



ご清聴ありがとうございました

